

平成 29 年 7 月 31 日

T.Kobayashi

吾妻連峰・裏磐梯のんびり旅
～浜通りから中通りへ会津へ 塩の道を結ぶ旅～

< 1 > みちのくに入る

平成 29 年 7 月 19 日 (水) 天気=快晴。千葉北 IC から東関東自動車道で大栄 JCT へ、圏央道に入りつくば JCT 経由で常磐自動車道へ。朝のラッシュ時なので国道 16 号線経由で柏 IC から入るより 20 分ほど早いような感じがする。いわき JCT から磐越自動車道に入れば福島へは早く着くが、早いだけではつまらないので、いわき中央 IC で下りて夏井川溪谷を眺めながらのんびり行くことにした。

IC を出て国道 49 号線を横切り工業団地の中を突っ切ると磐越東線の赤井駅付近に飛び出した。県道 248 号線 (磐城街道) を夏井川に沿って上がっていく。穏やかな傾斜の登り坂、緩やかに流れる夏井川、豊かそうな農村風景。小川郷を過ぎると徐々に山間に入っていきようになるが、さほど急峻な山ではなく谷の幅もゆったりして明るい。水力発電所をいくつかやり過ぎると谷が狭まり山の中らしい景色に変わってきた。江田駅を過ぎてしばらく行くと籠場の滝があり、その先が夏井川溪谷の核心部。

川前駅を過ぎて 2Km ほど進んだところで県道を離れて左折して山道に入る。昨晚地図を眺めていて見つけた差塩 (さいそ) 湿原に寄ってみることにした。海拔 5~600m 程度の



尾根を上り詰めると平坦な集落が広がってきた。海拔 522.7m の三角点がある小山と 522m の小山とに南北に挟まれた湿地に差塩湿原の看板が立っていた。低層湿原で、かなり乾いてきているが高層湿原に見られるミツガシワが自生している。集落の人たちが手入れをしているようだが、草刈りをしたことで湿原の一部が露出して 32 度以上ある灼熱が容赦なく降り注いでかわいそうな感じもする。湿原の隣にある農家の門口で黒い牛の一群が暑さにもめげずに食後の休憩をとっていた。



低い尾根の山裾に広がる谷津田は、くまなく米作りが行われており、豊かな集落を感じさせる所だ。地図を眺めると、湿原の北側の集落が「堀添」、南側に「道添」、小川を挟んで対岸に「江添」と「添」の字がつく地名が並ぶ。湿原の東側の山懐にある「東作」という地名も訳がありそうで気になる。

差塩の地名の由来は諸説あるようだが、「高い山から海が見えたことから、潮を差すのが起源」という説と「会津方面への塩の輸送の集積地だったことから、塩を差配するのが起源」という説が有力らしい。地図で周辺を眺め渡すと、塩田・塩沢・塩庭など

「塩」がつく地名があるので、塩と縁があることは間違いなさそうだ。再び県道に戻

って夏井川との並走を続ける。(写真上：差塩湿原 写真下：ミツガシワ)

やがて夏井川も磐越東線も磐城街道もそれぞれの事情で勝手に蛇行するようになり、小野新町 (おのにいまち) 駅を過ぎると県道は国道 349 号線に吸収され、磐越東線の線路は右にそれて山の中へ消えていった。

福島県田村郡小野町は小野小町の父である小野篁が朝廷から派遣されて、この地に館を作ったのが地名の由来で、小野小町生誕の地とも言われている。磐城街道に沿ってほぼ南北に広がる小野の町は、地図を見ているだけでも気になる地名が多いし、何よりも駅名の読み方が「おのにいまち」ということだけでも、興味が深まりさらに深入りしたくなる。

新町街道 (県道 19 号線) に入り、再び磐越東線と並走。順当に走れば郡山に出て国道 4 号線を福島に向かうことになるのだが、それではまともすぎてつまらないので、山間を曲がりくねりながら走って阿武隈川を渡って東側から福島の町に入った。

猛暑の一日、日も斜めになって福島の盆地独特の暑さも和らぎ始め、フルーツラインを横切って少しずつ高度を上げて行くと涼しさが増してきた。高湯温泉「玉子湯」の扉を開けると、その名の通りの「ゆで卵のにおい」のような温泉の空気に包まれた。

北塩原村という村名、喜多方にある塩川、その北部にある熱塩、桧原湖の西側の山中にある大塩という地名、これらが塩と縁のある土地であることを示している。字の名として残っている古い地名も、妙に新しく変えたりすると、その土地の歴史の伝承に不都合が起きる。将来にわたって慎重に取り扱ってもらいたいものだ。33℃はありそうな灼熱の湖畔も、湖面に浮かぶ磐梯山の姿を見ていると涼感を感じてくる。

昼食後は米沢街道を白布峠へ。県道2号線は戸倉川沿いに緩やかに上った後、海拔1000m付近でヘアピンカーブの連続になり急速に高度を上げる。1350m付近で県境の稜線に出て、東鉢山(1512m)の腹を巻いて行けば白布峠(1400m)。会津から米沢へ、米沢から会津へ、主要な峠道だった時代のことを想像しながら小休止。

峠を越えて山形県側に入ると植物の種類が変わり、雪深い北国を感じさせるものが目立ってきた。大樽川の源流を並走し白布温泉の前を通過してゆっくりゆっくり長い下り道。船坂峠を越えて東側の谷に出ると、そこは東大嶺の北面を水源とする最上川の流れになる。

関根から板谷峠の旧道を越えようと思ったら土砂崩れで通行止めと書いてあったので、水窪ダムを越えて栗子トンネル経由(国道13号線)に変更。しかしこれもまた水窪ダムの先で通行止めとのことなので、南米沢まで遠回りして13号線に入った。米沢盆地は34℃ぐらいありそうな厳しい暑さなので寄り道はせず、栗子トンネルに一直線。真冬には雪に埋もれるであろう盆地の佇まいを車窓から眺めただけで福島県に戻った。飯坂温泉付近から福島盆地の西端を走る「フルーツライン」と名付けられた道を、土産用果物を物色しながら走り、高湯温泉に戻った。週末に向けて宿泊客が徐々に増えてきたが、連泊の客も多いように感じる。

<3> さらば吾妻の山並み

平成29年7月21日(金) 天気=快晴。最後の朝風呂を楽しんだ後朝食。海拔800mで涼しい夜を過ごしてきたが、今日は34~35℃の世界へ戻らなければならない。福島盆地に下りるまでは車の窓を開けたままで最後の涼風を楽しんだが、フルーツラインに出ると猛暑の猛攻。果物屋・農協直売所・道の駅などで寄り道をしながら国道4号線を南下。右手車窓の山波は安達太良山から猪苗代湖東岸の安積の山になり、街道沿いのそば屋で昼食をとる頃には那須の山並みが遠望出来るようになってきた。白河中央ICから東北自動車道に入ったが、順当に走ったのでは面白くないので、栃木都賀JCTから北関東自動車道に入り友部JCTから常磐自動車道へ、そして往路と同じくつくばJCTから圏央道で大栄JCT経由東関東自動車道へというジグザグコースを辿ってみた。浦和経由よりも道路が空いていて走りやすく所要時間の点では遜色はなかったが、距離的にはやや大回りでも高速道路代が高くなってしまった。圏央道についてはまだ片側一車線ばかりか対面通行の箇所が多く、混雑時には大変そうなことと事故の可能性の点では怖さも感じた。

<4> ついでのはなし

ところで、「福島」という地名の起源は「吾妻おろし」がこの地のシンボルである信夫山に吹き付けることから「吹く島」と言われたことによるとのこと。信夫山周辺は湖沼地で信夫山自身も湖沼の島だったとする説と、盆地が霧の海になって信夫山が島のように見えたからという説とがあるらしい。

また、吾妻という山名の由来を調べてみると「東国をあづま(吾妻)と呼んだことに由来する」という説と「家形山を福島市側から見ると四阿の形に見えることに由来する」という説があるが、一方では「アイヌ語のアトマ(輝く湖)が語源」とする説もあるらしい。

小野小町伝説を合せると「東国説」は何となく現実味を感じるが……。

小町の父と言われている小野篁は802年(延暦21年)に生まれて853年(仁寿2年)亡くなっており、父である小野岑守の赴任に伴って陸奥の国に入ったとされている。

小野小町の生没年は定かではないようだが、825年(天長2年)から900年(昌泰3年)頃ではないかと言われている。「小町誕生の地」は全国各地に存在するのが現実で、小町伝説も諸説あり個々の信憑性は今ひとつらしいし、小町の存在そのものについても諸説あるようなので、この辺で止めておくことにした。

以上